



富山県「富岩運河」、「富岩運河環水公園」の紹介

○富岩運河の概要

富山駅北と富山港（岩瀬地区）を結ぶ約 5.1km の富岩運河は、昭和 10 年に完成し、富山の工業化に大きく寄与した運河で、現在の環水公園となっている場所は、富岩運河の最上流部に位置していることからかつて船の物流が行われた時代（昭和 30 年代半ばまで）は「舟だまり」として利用されていた。その後、物流の中心がトラックに移ってからは運河本来の機能として活用されていない状態が長く続き、運河を埋め立てて、道路や公園にする案が浮上していた。

昭和 50 年代後半になり、県では埋め立て計画を見直し、街なかの貴重な水辺空間として活用する方針に転換することにより、富山駅北地区における都市拠点の形成を目指した「とやま都市 MIRAI 計画」のシンボルゾーンとして富岩運河環水公園が計画され、富山の自然と富岩運河の歴史を活かしながら、都市に残る貴重な水辺空間として整備を進められることとなった。

◇中島閘門

- 昭和 9 年に建設、運河のほぼ中央部に位置
- 上流と下流の水位差 (2.5m) を二対の扉で調節するパナマ運河方式を採用 (長さ約 60m、幅約 9m)
- 平成 9 年に改修工事を実施 (当時の門扉等を復元)
- 平成 10 年に昭和の土木構造物としては全国で初めて国指定重要文化財に選定



中島閘門（国指定重要文化財）

○富岩運河環水公園の概要

位置：富山市湊入船町（富山駅より徒歩 9 分）

面積：9.7ha の都市公園

主要施設：泉と滝の広場、天門橋、野外劇場、見晴らしの丘

整備年：昭和 63 年度～平成 22 年度（平成 23 年 3 月末に全面開園）

整備事業：都市公園事業

公園利用者数：約 109 万人（H23 年度）



■水辺レポート

○主な公園施設

◇天門橋

- 運河の兩岸を連絡するとともに、周辺の景色を楽しむ
- 橋長 58m、水面からの高さ 9m、展望塔高さ 20.4m
- 展望塔間には「運命の赤い糸」ならぬ「赤い糸電話」があり、愛の告白スポットとなっている



天門橋

◇野外劇場

- 小運河の斜面を利用した観客席を持つ野外ステージ（ステージ 321m²、観客席 660 席）

◇見晴らしの丘

- 園内を一望できる高さ 7m の丘
- ふわふわドームやネット遊具が設置



野外劇場

○賑わいづくりの取り組み

平成 26 年度末に予定されている新幹線開業を見据え、富山の玄関口となる富山駅周辺の魅力向上の一環として、富岩運河環水公園が富山駅北地区と一体的な賑わい空間として活用されることが求められている。

県では、平成 19 年 6 月に「環水公園賑わいづくり会議」においてとりまとめられた賑わいづくりの提案を実現するため、富山市や関係団体の協力を得ながら、以下の取り組みを行っている。

◇富岩水上ライン

- 環水公園から中島閘門（国指定重要文化財）を經由して岩瀬までをソーラー船「sora」と電気ボード「もみじ」で案内するクルーズ。（H21.7 運行開始）
- 地元ボランティアガイドが案内
※ 土・日曜日、祝日の運行、平日は予約運行



富岩水上ライン（ソーラー船）

◇各種イベントの実施

環水公園の日イベント（毎月第 3 日曜日）のほか、四季を通じた多彩なイベントを実施している。

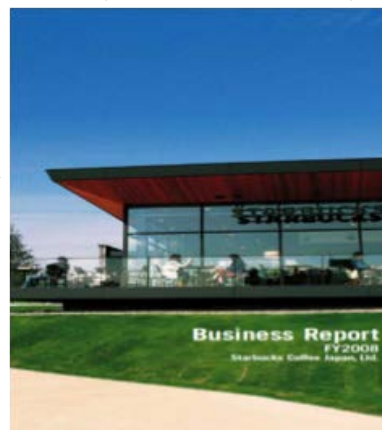
- 春「キッズフェスタ」水辺のコンサート、大道芸など
- 夏「夏まつり」花火、水辺のコンサート、屋台など
- 秋「運河まつり」運河クルーズ、カヌー体験会、屋台など
- 冬「スイートクリスマス」イルミネーション、花火など



花火（夏まつり、クリスマス）

◇スターバックスコーヒー等の出店

- 環水公園の利便性や魅力向上及び賑わいづくりに資することを期待し、公園にふさわしい飲食店を出店するものを公募
- 店舗のデザインが環水公園にふさわしい上質なものである等の理由により選定。（スターバックスの都市公園内に出店は全国初）
- 2008 年に世界中でオープンしたスターバックスの中で最も優れたデザイン店舗に贈られる「ストアデザイン賞」を受賞
- H 23 年 4 月には運河沿いにレストラン「ラ・チャンス」も出店



スターバックス・コーヒー

富山県土木部 倉田 清



水と土の芸術祭 2012「新潟のみずつちの原点を探る、信濃川を訪ねる旅」参加者からのレポート

■学ぶ事と遊ぶ事、その絶妙感

朝、7時、出発のバスに乗り込みました。初めての方ばかりです。自己紹介で次々に話をされます。どなたもご自分の意見を、はっきり言われます。次から次へと話が出る動く移動教室です。変わりゆく風景を見ながら新潟県の信濃川の講義が続きます。

毎日の生活とマスメディアからの情報で暮らして、人はどうあるべきか、戦争をしている国もありますが、自分の住む国土について全く知りませんでした。

働くことと学ぶ事がこんなにも密接な関係にあったことは、このバスに乗るまでうかつにも気がつきませんでした。旅をしながら学ぶ、人と交わり、学ぶ楽しさを知りました。



長野市を望む姨捨PAで説明する大熊代表

見る、聞く、考える。日常の行動半径を超えてのフィールドワーク、初体験の連続でした。なぜ、今まで、考えてこなかったのか。何事も無関係ではありません。あまりにも無関心で時を過ごしてきたのでしょうか。自分の身の周りの事以外、知らない事ばかりです。

発見、触発、地殻変動です。おどろきです。新鮮です。学ぶ事がたくさんあります。

稲が実っています。昔は水びたしで反当たり3俵とれば良いといわれていました。今は10俵作られます。排水、かんがい用水がつかられて、広い面積での収穫が可能になり、水との戦いに勝ちました。しかし、越後平野にはカエルなど生物が住んでいません。除草剤を使いすぎて、土が死んでしまいます。草が生えてカメ虫が多くなると、お米の品質が悪くなります。いろんな生物が育つとカメむしは、いなくなります。

みずつち学校で大熊代表は、鎧潟の復活を提唱しています。人工的である排水ポンプ場が止まれば、越後平野は一面水びたしになる事を忘れてはならないと。

越後平野は潟を埋めて田んぼに変えてきました。一方、福島潟は田んぼを遊水地に戻しました。長い歴史の中でようやく全面開拓に成功して今日があります。

黒姫が見えてきました。ここに住んでおられるC.W.ニコル氏は、今ある自然を将来も残すために30ヘクタールの面積を買って、財団法人化し、日本の未来の人々への橋渡しに尽力されておられます。

太田切川、白田切川、江戸時代、参勤交代でこの山坂の難所を金沢の殿様は通ったそうです。現在の妙高大橋の付近でしょうか。

バスを降りて、姨捨パーキングエリアからの広大な景色、川が幾重にも分かれて、米を作るために、たんぼに水をせきとめるための畔をつくる。田毎の田んぼ。

昼食はジンギスカン料理でした。この場所も昔は羊を飼育していました。今はニュージーランドから食材を仕入れているそうです。川を見つけるたびにバスを降りて見学、説明、実地での興味深いフィールドワークが続きます。こんな風に自分の住んでいる足元を見て、考える作業は初めての経験でした。

ダムも2日間で8か所、つり橋を渡り見学、現地でお話をお聞きました。

大地の芸術祭も2日間、見学させていただきました。矢放神社の大きな八本杉、まわりを大人が6人手をつなげても届かない。天高くそびえています。



津南町外丸にある「天然記念樹の矢放神社八本杉」で

スケジュールびっしりで次から次と移動、見学、現地スタッフの説明、盛りだくさんの内容、学ぶ喜び、遊ぶ楽しさ満載の2日間、ありがとうございました。お礼申し上げます。

■水辺レポート

■「新潟のみずつちの原点を探る、信濃川を訪ねる旅」に参加して

人間は誰でも自分の生れ故郷の山河を話すとき、例えようもない好い表情をする。阿賀野川のほりにある本所（新潟市東区）に生まれ、幼い頃から川を遊び場とし、川に対して畏敬の念を持つ世代である私にとって信濃川は、また阿賀野川と同様「わが母なる川」でもある。

夏も終わりの早朝、総勢 30 名、中型バスで一泊二日の旅に出発する。事前集中講義で、信濃川は甲斐、武蔵、信州の三県境に位置する甲武信ヶ岳 2,475m に源流を発する流路延長 367km、流域面積 11,900km²、年間流量約 160 億 m³ を有する日本を代表する大河であり、上流部の長野県では千曲川と呼び、新潟県では信濃川と呼ばれることを学んだ。

まず、長野盆地で千曲川による洪水と人の営みを知る。安曇野の大王わさび農場で湧水地を見る。水量豊かな安曇野は、三川（穂高川、高瀬川、蓼川）合流地点であった。渇水期なのに滔々として流れている。山間の犀川には、東京電力のダムが 5 箇所もある。茶色に汚れた川の水は水温が高く、魚も行き来できず人々の営みは感じられないダム優先の状況だった。夏場の渇水期は無水区間となるという。せめて維持流量くらい流してもらいたいものである。



水が流れてなく、ため池の水内ダム

千曲川下流の西大滝ダムでは、東電の社員の丁寧な説明があり、魚道を見ることができた。

新潟と長野の県境の森宮野原駅は「日本最高積雪地点」の標識がある。昭和 20 年 2 月 12 日、積雪 7.85m とある。昭和 20 年の豪雪は語り草だが、電柱がまたげる高さに積もったという。これより千曲川の名称から新潟県に入るの信濃川と呼ばれる。

千曲川から信濃川、河口より 153km、新潟県境津南町の河岸段丘を見る。越後妻有地域の妻有は、詰まりの意である。半世紀前、当地へ生活指導の仕事で来た頃津南、秋山郷などは最果ての地に思えたが、豊かな自然に囲まれ、素朴で人情溢れる人々との交流は懐かしく、日本の原風景であった。

黒煙吐く飯山線の列車や、渡し舟が川を往来していたことを思い出した。現在、第五回の大地の芸術祭が開催中で数多くの作品の中から、幾つか見ることが出来たのは嬉しいことだった。

なかでも、足滝に生きる「記憶－記録」は、人間と自然がどう関わっていくかを示しているようだ。また「国境を越えて」では、台湾人の作家が日々の営みを里山と融合させて表現していたが、銅鑼の音とともに心に残った。



「記憶－記録」足滝の人々 2009 年 霜鳥健二作品

「鯛雲天にひろがり萩咲けり 秋桜子」

大地の芸術祭のコンセプトが「人間は自然に内包される」ということだが、アートを媒介として自然環境を見直し、地域再生の道筋を辿っている様子が伺われ スタート以来、何回か訪れているが人々との交流により、定着しているようだ。

とくに、二日目の早朝散歩でアート巡りをした際、地域の高齢者が作品の木を手入れしている様子に里山とアートの似合うことに気が付いた。地域が積極的に学びと遊びを取り入れ、生き生きとしている様感じた。

宮中取水ダムでは、JR 職員が新しい魚道の説明をしてくれた。目前に魚が通る様子を、親子連れで楽しめるし、自然も学べる。水はダムだけでなく、この様な遊びに使った方ははるかに好い。中里から川西、下条にかけてバスの車窓からアートを見ながら、蒲原大堰、中ノ口水門、横田切れ跡地、大河津分水路を巡る。大河津資料館庭にある記念碑「萬象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ」「人類ノ為



大河津分水手沿いの信濃川補修工事竣工記念碑
 米国ノ為メ] 青山士の志と洞察力が見る人のところを打つ。
 犀川から千曲川、信濃川に至り、最下流の佐渡汽船展望レストランの昼食は、昨日から川の流れを遡り日本海に注ぐ現状を目の辺りにし感慨深いものであった。

「遡ることにより見えてくる未来」最終章のクロスパルで見た吉原氏の映像「シビタ」は印象深く、遡ることにより見えてくるのは全てに共通していると思った。

遡ることにより、信濃川最下流の港町新潟の暮らしが理解できた旅であった。

最後に一日目の七輪によるジンギスカンの昼食は暑かったが美味であった。また、夕食は大熊先生の古希の誕生祝で沸いた。みずつちの原点を探るワークショップも、川との付き合い方を通して人々がつながり、よい形でまとめることができた。



大熊代表の古希の誕生会で記念品を渡す

この様に楽しく学ぶことができたのは、講座及び案内役の大熊先生の見識と懐の深さによるもの、事務局の用意周到なご配慮によるものと感謝の念でいっぱいである。

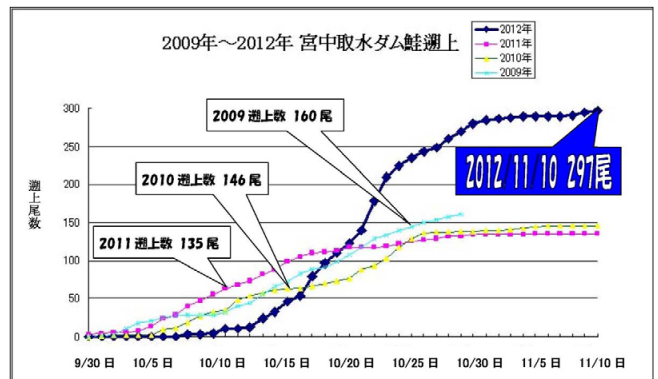
会員 山田 淑子

report 2012年 信濃川・千曲川への鮭の遡上

◆ 期待の 300 尾鮭の遡上

今年の9月10日に始まった宮中取水ダム魚道での鮭捕獲調査は、約1ヶ月経た10月7日になっても一匹の鮭も遡上してこなかった。

平成20年JR東日本の不正取水問題が発覚、翌年JR東日本は取水権取消し処分となり、宮中取水ダムは全開され、戦後最多の160尾の鮭が宮中取水ダムまで遡上した。翌年から信濃川中流域水環境改善検討協議会からの提言を受け5年間の試験放流となった。22年、鮭の遡上期の水量は100m³/sで146尾の鮭が遡上した。翌年の23年には80m³/sとなり135尾の鮭が宮中取水ダムまで遡上した。



JR東日本・宮中取水ダム魚道での鮭の捕獲調査結果

この結果から、鮭の遡上数とダムの放流量とが概ね比例傾向にあった。今年の放流量が60m³/sとなることから鮭の遡上数も減少も予想されていただけに「やはり」と観念しかけた8日、今年初めて3尾が遡上し、改造した宮中ダム魚道へ放流したがその後も前年度を下回る捕獲数が続いた。

その頃、北海道大学の帰山雅秀先生より日本近海の海水温が高く、鮭の遡上が遅れ、あるいは回遊出来ずに減耗している個体も多いと情報が入った。

これまで鮭稚魚の市民環境放流を6年続けてきたことより今年の目標は300尾としていた。

ああ今年は駄目かと、諦めが頭をよぎった14日より目に見えて遡上数が増していった。そして18日これまでの最多捕獲数であった平成22年10月25日の15尾を軽く越す26尾/日を数え、一気に例年並みとなった。

その後も勢いが衰えることなく3年間のデータを塗り替え、23日には38尾/日の遡上記録を更新し続けた。調

■水辺レポート

査最終日の11月10日も3尾捕獲し、合計297尾（オス163尾、メス134尾）とこれまでの倍近くとなった。

◆ 65年ぶり、上田の千曲川に鮭の遡上



65年ぶりの鮭の遡上を喜ぶヤナ場経営の中山さんご夫婦

平成22年10月20日、信濃川河口より253kmの上田市千曲川のヤナ場で産卵後のメス鮭（体長60cm、体重1.6kg、3年魚）が発見され、長野県のテレビ、新聞等で大きな話題となった。

◆ 2度目の正直

「初鮭や ほのかに明けの 信濃川」井上井月

新潟水辺の会会員で岩手県立大学教授の金子与止男氏より、越後長岡出身と云われる井上井月（1822～1886）の句が送られて来た前日の11月13日午前6時過ぎ、ほのかに明けの上田市千曲川の同じ中山ヤナ場に、2度目のオス鮭（体長57cm、体重1.7kg、2年魚）が発見された。



2年前と同じヤナ場で発見された標識を付けた鮭

2年前に鮭が発見された際、誰かがここに置いたとか、たまたまの偶然が重なったとか話はいろいろに発展していったが、その偶然も2度重なると、私たちは本当に稚魚放流の成果が出てきたと実感が湧いてきた。

この鮭にはタグ（緑の100番の標識）が付いていた。

この鮭は11月8日午前8時に宮中取水ダムの魚道で捕獲され、体重、体長、雄雌の判別後、タグを付け写真を撮って上流に放流された鮭であった。21km上流の西大滝ダム魚道にも捕獲用網が設置されていたが11日調査終了で撤去された。

その為西大滝ダムでの確認は出来なかったが、西大滝ダムから上田の中山ヤナ場までの約79kmを2日強で遡ったことになり、海洋並みの1.7km/hの速度で遡上したと推測される。

◆ 西大滝ダム魚道への遡上

当会が稚魚放流を始めた後の長野県への鮭の遡上は、平成21年2尾、22年3尾、そして昨年は戦後最多の35尾の鮭が西大滝ダムを超え上流に向かって帰って行った。

そして今年は最低でも50尾の鮭が西大滝ダムまで来てくれるだろうと大いに期待していたが、結果は12尾というものであった。

年度	宮中放流量	宮中鮭遡上数	西大滝遡上数
H 21	全流量	160尾	2尾
H 22	100m ³ /s以上	146尾	3尾
H 23	80m ³ /s以上	135尾	35尾
H 24	60m ³ /s以上	297尾	12尾

◆ 今後の鮭遡上活動

本活動は、漁業としての鮭漁の復活を目標とするものではなく、信濃川の水量が回復し、長野で産卵・孵化した鮭の稚魚が安全に日本海まで降り、再び成魚が河口新潟から長野まで遡上できる環境を整え、信濃川の生物循環経路を復活させ、本来の川に復元させようとするものである。

今年の9月、三井物産環境基金より朗報が届いた。これまでの活動が評価され、10月から3年間の助成(H24.10～H 26.9で760万円2割の自己資本)が継続されることとなった。

これまで河川環境改善の取っ掛かりとして鮭の稚魚の人工孵化による放流を行ってきたが、12月中旬には上田市千曲川の支川・浦野川にて、発眼卵（1万粒）の自然産卵着床（より自然状態に近い形での孵化および降下）を試みる予定である。更には鮭の稚魚放流支援サポーター基金」を設け、多くの方々から支援を受けるチラシも作製中である。今後も皆様のご協力をお願い致します。

事務局 加藤 功

04
鳥屋野潟のさくらと湖岸整備

鳥屋野潟は新潟市中央区の南部にあり、亀田郷の遊水池として機能しています。面積は190ha、東西約4km、東北1km、周囲の住民は10万人となっており、湖底地の公図確定も終わり今ようやくその整備計画の検討に入ったところです。



先人たちが賑わいのまちを願いこめた湖岸の桜並木

湖周には約600本の桜があり、市民から親しまれており、この地域の象徴となっています。しかし樹齢は老齢となり倒伏の危険が迫っている状態でもあります。

私はいま新潟市の附属機関の委員として、環境関係の部会に所属しており、桜の調査をしてその結果を市民の皆様へ伝えながら、鳥屋野潟のこれからあるべき姿を考えることにしています。

この桜はいつごろ、誰が、何のために植えたのでしょうか。調べている中でこの地域が芦沼と言われている劣悪な環境の中で力強く生き抜いてきた亀田郷の農民と大きく関わっていることが分かりました。

1896年(明治29年)栗ノ木川末流の沼垂町竜が島に逆流止めの水門が作られました。1927年(昭和2年)大河津分水路が完成しましたが、深田からの脱却は出来ませんでした。1941年(昭和16年)栗ノ木排水機場が着工され、1948年(昭和23年)に完成いたしました。これより水田の乾田化と耕地整理が進み、深田から美田へと変わったのです。排水機場完成により鳥屋野潟の水位は約1mも低くなり、この地域に住む人々の、あらゆる面において与えた恩恵には、はかり知れないものがありました。これを記念して湖周全域に桜を植栽することになったのです。当時石山地区の村長、県会議員でもあった故小沢栄一さんが提唱し、新潟市に申請して行われたものです。湖水はきれいで、ヨット競技なども行われ市民の憩いの

場所となり、同時にここを観光地にしようとの計画もされていました。桜はこの地域の歴史と発展のシンボルでもありました。

このように市民の思いを託して植栽された桜も、いまその寿命を迎えています。

以下その実態の調査をいたしました。その場所は、無規則に開発されている北湖岸の、弁天橋から上沼までの167本です。その結果は、老齢樹(40年生以上)129本(77.2%)・幹の傷み大が117本(70.0%)・キノコの確認が31本、天狗巣病2本、車による根の踏み固めが46本(27.5%)、根の剥離損傷が29本(17.4%)となっている。総合評価では全体の80%を超える個体に異常が観察されています。



老齢や傷みで桜の木が弱ってきている

いま新潟県では鳥屋野潟の整備について検討を始めたところです。いうまでもなく整備の基本は堤防による治水が基本であり、私はこの桜の更新も含め、一体化した計画を提案しています。

かつてここ鳥屋野潟北側に接するこの地区は平成10年8月4日、堤防からの溢水で被害が最も多かったところです。このとき堤防が浸蝕破壊されたと思われるところが広範囲にあり、堤防が水面に落ち込み危険なところが多くあります。そこに桜が今にも倒れそうになっていて、枝は水面に垂れ下がっています。

この地区は道路に沿ってその平面に桜があり、それが堤防となっていますので、新しく築堤が必要となっています。遊歩道や桜の植栽帯も含めて、景観に配慮しながら自然との共生を考え、かつて先人が目指していた賑わいのまちづくりに期待いたします。

監事 香田 和夫

2012 新潟水辺の会黒部川ツアーに参加して

昨年の信濃川大河塾に続き、2012年9月20～22日に新潟水辺の会が主催する『黒四発電所・トロッコ電車の旅』に東京から参加した。

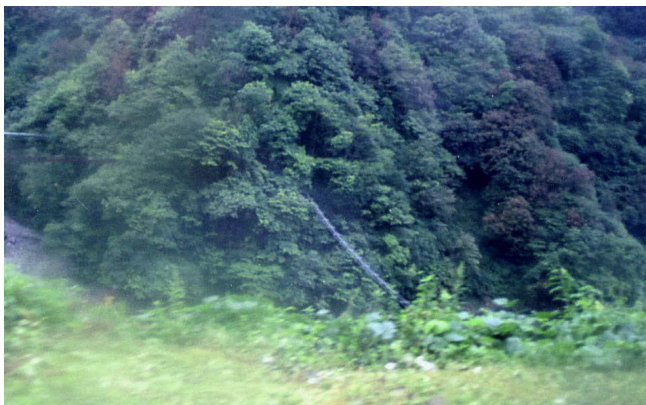
ツアーでは1日目は富山ライトレールや富岩運河など富山市内、3日目は安曇野や千曲市なども見学したが、本稿では2日目に関西電力の御好意によって実現した『黒部川非公開ルートによる溯行の旅』についてご報告する。

— 関電の作業車に便乗 —

前夜は宇奈月温泉に宿泊した我々は朝8時から関電職員から事前説明を受け、黒部峡谷鉄道のトロッコ電車で樺平駅を出発した。一般客より後方の、関電職員が出勤するための業務用車輛（窓があるリラックス客車）に乗車した。前寄りの観光客と全く異なり、ヘルメットに安全靴のフル装備の姿には、これから厳しい川の現場に向かう強い気迫が感じられ、思わず会釈して同乗の挨拶をした。黄色いヘルメットに青い制服の関電職員は、作業のための駅（一般の乗降は不可）に着くと数人ずつ川に向けて降りていった。沿川に道路がないため、人材はもちろん重機も全て分解してトロッコ電車で運び、現地で再び組み立てて使うのだそうだ。また時折車窓から見えたコンクリート製の「冬季歩道」は、とても狭くて暗く、職員と物資の往來を徒歩に頼る冬季の厳しさを垣間見た思いだった。

— サルの釣り橋 —

宇奈月を出てしばらくした車窓には、宇奈月ダム湖で



手すりのない『サルの釣り橋』

分断されたニホンザルを往來させるために国交省が架けた『サルの釣り橋』がちらっと見えた。

関電の方に伺うと、年に50回程は乗車する中で数回は渡るサルの姿を見るそうで、意外に利用されているようだ。ダムができる前には自由だったサルの移動を釣り橋で補償する意味は、ダム湖で集団が孤立して遺伝的に劣化させないための措置だが、もっと全国に普及してほしい対応である。

— 堆積土砂を排出するダム —

今回見学した中では最下流の宇奈月ダム（国交省）と次の出し平ダム（関電）には、ダム湖に堆積した礫を下流に排出させるための「排砂ゲート」が設けられていることが大きな特徴である。大きな出水の後期に、黒部ダムの放流も加えた掃流力を利用して、二つのダムが連携して排砂の操作をするそうだ。当日の車窓からは、上流の出し平ダムの放水口から水が吹き出している様子が見られた。



出し平ダムと堆砂放流口

黒部川には出し平ダムの上流に小屋平・仙人平・黒部第四ダムがあるが、排砂装置を持つのは下流の二つダムだけだそうだ。

— 多彩な溯行手段 —

樺平駅で溪谷鉄道のトロッコから巨大な豎坑エレベーターに乗換えて200m上昇し、今度はバッテリー駆動の機関車に牽引される「上部軌道」の超小型客車に乗り、工事では難関だった「高熱隧道」を越えて第四地下発電所に到着した。発電所では見学と昼食後、

地下軌道を斜めに動く「インクライン」と呼ばれるケーブルカーで約450mを登り、第四ダムまで行くバスに乗車した。途中のタル沢横坑で一度下車して少し歩き、本流の十字峡の遥か上に当たる外の風景を眺めたが、自分の立つ位置が信じられない思いだった。しかしこの横坑もかつて工事中の土砂と湧水を下の沢に落とすための施設と聞いて、当時の技術力から仕方ないとは言え複雑な気持ちだった。湧水（地下滲出水）は現在も横坑から下に放流されている。最後のバスを降りてからは、歩いて第四ダム各所を見学し、一般客とともにトロッコバスで扇沢に抜けて信濃川流域に移動した。

これら黒部川沿いの移動手段の多様さは、ダムや発電所建設のための人や資材を運び搬出するためのルート設定の困難さの結果であり、当時の技術と技術者の心意気を十分に感じる事ができた。そして現在も日々このルートを利用して仕事に従事する多数の関西電力職員の姿には敬服した。

―需給調整ができる水力発電―

第四発電所では4基の発電機のうち1基のみが稼働していた。水力発電は需要の変化に対応して供給量を調整できる点が優れているそうだが、黒部川流域を合計しても最大で関西全体の1%しか占めないそうだ。富山市の管理室を始め、宇奈月から黒四ダムまでの流域に多数の職員が厳しい環境下で働いて維持されている黒部川の水力発電の総量は意外に少ないことに驚いた。



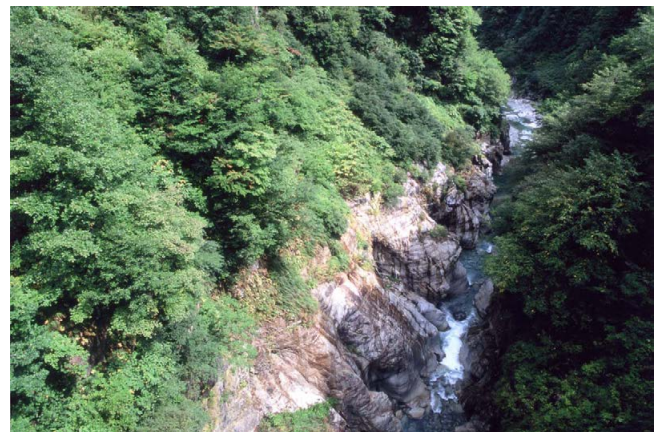
関西電力では必ずダムに維持流量を確保（黒四ダム）

―荒れている河床―

トロッコ列車はトンネルも多く、川を見渡せる場所

は余り多くなかったが、黒部川合流点付近を渡る後曳橋、鐘釣橋、櫛平駅などで黒部川を眺めることができた。周辺地形は急な崖線の下を流れる急流河川なのに、意外にも河床には大量の砂礫が堆積しており、関電による大掛かりな除去作業が各地で行なわれていた。

上流側の3つのダムでは河床材料の移動が途絶え、また沿川が急峻な崩壊地形であるため山腹の滑落痕が多数見られた。岩肌に巨石が転がって透明な水が流れている黒部川らしい風景は、僅かに上部軌道の仙人平ダム下流の仙人峡で見下ろせただけだった。しかしここもダムで上流からの砂礫は供給されず、流径が大きく簡単には移動しない巨岩だけが残った風景なのかもしれない。橋の上流にある仙人平ダムも殆ど堆砂していることが目視され、排砂により機能を維持しているそうである。



黒部川らしい仙人谷の風景

勾配が急峻で激流のイメージがある黒部川は電力を生み出すには好適な地形なのだろうが、比流砂量全国1位と砂礫の生産量が大きいので、ダムによって塞き止められ物質循環が断絶される影響も大変大きいのだろう。

急流河川である黒部川から電力資源を産み出すために行なわれている関西電力の努力の数々に触れ、また流域の雄大な自然を垣間見ることができて、誠に有益な旅であった。種々の助言を戴いた大熊 孝先生と加藤 功事務局長に深謝申し上げる。

会員 君塚 芳輝

南相馬市太田地区まちづくり委員会との交流報告

好天气に恵まれた10月20日(土)南相馬市太田地区ご一行22名を出迎えるため、待ち合わせ場所の中央IC出口に向かった。(加藤さんはどうも早く着きそうなので新潟県庁の屋上から信濃川を見せようと意気込んでいる)だが、現地に着くと相手の姿は一向に見えない。携帯でようやく分かったこと、(時間調整している。時間どおりに到着しますとの連絡に安堵、加藤さんのサービス精神旺盛、単なる取り越し苦労であった)

高橋 清会長、米津教喜事務局長以下、元気のよい人たちとの出会いは和やかな雰囲気からスタート。信濃川ウォーターシャトル乗船まで自己紹介も兼ねて水辺の会の設立から現在までの活動内容を簡単に説明。短時間の交流ではあるが下記日程通り実りある交流会にと願う。



新潟県庁裏の信濃川船着場にて

11:20 新潟県庁裏の船着場より信濃川ウォーターシャトルに乗船→信濃川→萬代橋→

11:46 朱鷺メッセ到着

12:00 新潟市漁業共同組合食堂(新潟県水産会館)にて昼食

12:40 通船川山の下閘門排水機場見学(筏での木材運搬の見学も可能に)

13:20 新潟市東区役所会議室にて「懇談会」

15:20 南相馬市へ出発

ウォーターシャトルに乗船、約26分船上より萬代橋を始め、右岸・左岸から見る新潟市の状況を説明、カモメの歓迎と穏やかに流れる信濃川からの心地よ

い風にお互いに話が弾む。

地震当時のこと、その後の活動のこと、まだまだ先の見えないもどかしさ等々。

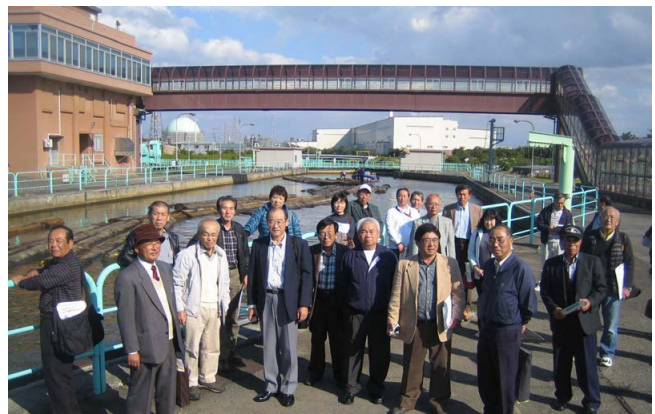
昼食はとても美味しかった。時間が30分ほど超過する。(朝早く出発した太田地区の方々には丁度よい休憩になったのではと思う)

次の見学場所の山の下閘門排水機場では、通船川を見渡す4階の研修室ではパネル等見ながらの説明や万代高校のカヌー練習をみて、通船川を理解していただいた。



通船川を見渡せる4階研修室にて

その後閘門脇に移動し、排水機場場長より実際に閘門が開き水が流れ出る様子等見ながら仕組みについて説明を受けた。施設内からは又、あまり見る機会のない通船川での筏下りが私たちを待っていたかのように通ってくれた。「筏が通るよ～」と加藤さんのかけ声により一行は集合。数分でしたがあっという間に水門が開き、あっという間に筏が通り抜け、360度回転するロータリーボートにも圧倒され、感動



筏の入った山ノ下閘門排水機場にて

した。

「今日はとてもよい所を案内していただいた。それにしても水の濁っている川ですね」

「いやあ～材木を運ぶ筏、はじめて見ました。今度孫を連れて見に来たい」等々

説明がよかったのか??今聴いたことを自分の言葉でメンバーに一生懸命説明しているリーダーがいて思わず微笑む。「百聞は一見にしかず」多くの説明より現地見学が一番の効果を実感する。その後、急いで大熊会長の待つ「新潟市東区役所会議室」へ。

懇談会では当水辺の会に対する設問(事前に出されていた件)に対する答えや今取り組んでいる鮭の遡上の現状等を説明、大熊会長への質問なども含め話が弾んだ。次に高橋 清会長より太田地区まちづくり委員会の現状と課題について説明を受けた。



新潟水辺の会の活動報告

活動がスタートして2年目にして「東日本大震災」が発生し、東京電力福島第一原発の事故で地域は放射能で汚染され避難を余儀なくされた。太田地区のまちづくりの人たちも多く罹災し、未だに仮設住宅に暮らしている。今日も仮設住宅から参加している等厳しい状況は変わりなく復興は一向に進んでいない。又、放射線量が多いため人口の4割がふるさとに戻れない現状はあまりにも厳しく、特に子どもたちが一番心配との言葉に胸が痛む。だが、委員会では「この灯を消さない」「流れを止めない」よう活動を続けていきたいと語ってくれたことに大きな勇気をもたらした。

また、太田川の水質、川底泥の検査結果の表を見せてもらい、まさに人間が生きていくにはほど遠い数値に唖然とすると同時に水は流れても川底泥は流れていかないという現実には愕然とした。



高橋会長より南相馬市の説明

解決するにはどの位の時間が必要か想像もつかない。私たちも「決して福島のことには忘れません」と言葉をかけてみたが空しく響いたかも知れないと感じた。

しかし、みんなは笑顔で「ありがとう」と応えてくれたのが何よりも力強く福島人との出会いに感謝、感謝である。お互いの意見交換を通して有意義な時間を共有できたと思う。復興にはまだまだ時間はかかると思うが、まちづくりの皆さんの明るい笑顔に「太田地区の明るい未来」は必ず来ると信じた。



参加者全員で記念撮影

11月には「越後新川まちおこしの会」が訪問する計画があると報告もあり、今後も太田地区の皆さんと交流を深めていきたい。終了後、一行は「新潟ふるさと村」に車を走らせ、お土産と新鮮な野菜などを購入し1時間遅れで帰路につかれたとのこと、大変お疲れ様でした。

副代表 梶 瑤子

新潟水辺イベント情報

○傑作ドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」 ニュープリント、リバイバル上映



11月24日より約1か月間

特別鑑賞券 1,200円 (当日一般 1,400円)

上映：ユーロスペース (渋谷・文化村前交差点左折)

12月02日12時40分より大熊会長のトークをはじめ、撮影担当の小林茂さんなど連日上映後のトークショーがあります。(詳しくはホームページをご覧ください)

元水辺の会会員佐藤真さんの初監督作品。第24回ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭で銀賞ほか4賞受賞、山形国際ドキュメンタリー映画祭優秀賞受賞、フランス・ベルフォール映画祭最優秀ドキュメンタリー賞、サンダンス・フィルム・フェスティバル IN TOKYO グランプリ受賞など獲得。

新潟水俣病という社会的なテーマを根底に据えな

がらも、阿賀に生きる人々の命の讃歌をまるごと収め、世界中に大きな感動を与えました。

ホームページ <http://www.kasamafilm.com/aga>

○三人委員会山梨(清里) 哲学塾 ～ローカルな思想の存在価値は

変化したのか! (仮題) ～

2013年2月8日(金)～10日(日)

三人委員会哲学塾は「そもそも思想はローカルである。」を原点に、1997年静岡県掛川市で開催し、長野県飯山市、群馬県片品村とバトンを繋いできた。その間、私たちを取り巻く情勢は大きく変化しており、哲学塾は毎年、様々なテーマで議論を重ねてきた。三人委員会での議論はローカルな場を原点に「結論を出すことを目的とするのではなく、議論を深め理解し合うこと」です。

特に、ここ数年、真に時代の大きな転換期に直面している中で、今回は議論の場所を山梨・清里に移し、哲学塾の原点に立ち戻り、延々と議論していきたいと考えます。(企画案より抜粋)

会場：山梨県北杜市清里 萌木の村及びその周辺

2月8日午後より討論、ウエルカムパーティー

2月9日オプション体験、討論、現地視察、ローカルイズム交流会

2月10日総括討議、昼に終了

参加費：未定

参加申込：ホテル ハット・ウォールデン 木内

電話 0551-48-2131

編集後記：新潟水辺の会に今年入会していただいた会員は現在16名です。例年よりも多く、ホームページをリニューアルした効果かなと考えています。会全体では、顧問8名、法人9団体、個人177名、その内、世話人(理事)は27名です。毎月第4水曜日午後7時から世話人会(理事会)を行っています。今までは関屋地区公民館でしたが、今年の9月から新潟市市民活動支援センター(新潟市中央区西堀前通6番町894番地1・西堀6番館ビル3階、025-224-5075)で行っています。2時間程度の会議では、ひと月間の結果報告とこれからの検討課題について討議しています。普段はメールでやり取りはしていますが、実際に顔を会わせる事が出来る大事な会議です。しかし、参加者は10名程度です。都合が悪くて参加出来ない方も居るとは思いますが、会が活性化するにはこの辺から改善すべきかもしれません。支援センターでは利用時間内は西堀地下駐車場の料金が免除されますし、古町にも近く交通の便のいい場所にあります。世話人以外の会員の方でも、どうぞ遠慮せずにご参加ください。編集人：森本 利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会

●事務局

〒950-2264 新潟市西区みずき野4-7-15 大熊方 Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

●ホームページ <http://niigata-mizubenokai.org/> ●メール info@niigata-mizubenokai.org

●会員数 個人会員177名、法人会員9団体、顧問8名(2012年11月30日現在)